

## 美術鑑賞

～～ 一人ひとりの感性で ～～

岡崎信吾

ウィーンといえば音楽という言葉がすぐ結びつくほどにウィーンは音楽の都であることに異存はないが、美術も、しかしなかなかのものである。ブリューゲルの作品数では世界屈指の歴史美術館、デッサン美術館として名高いアルベルティーナ、クリムト、シーレのベルベデーレ美術館ほか、近年開館されたレオポルド美術館、モダンアート美術館など、ウィーンという都市規模からすれば美術館の数は多く、その収蔵作品の質も高い。これらのことは今でこそ日本でも知られるようになったが、私が日本人会の主催で1987年、88年美術鑑賞のお手伝いをした当時は今ほど知られていなかった。そのため参加者は新鮮な驚きと関心でその後も数回熱心に美術館巡りをしていった。

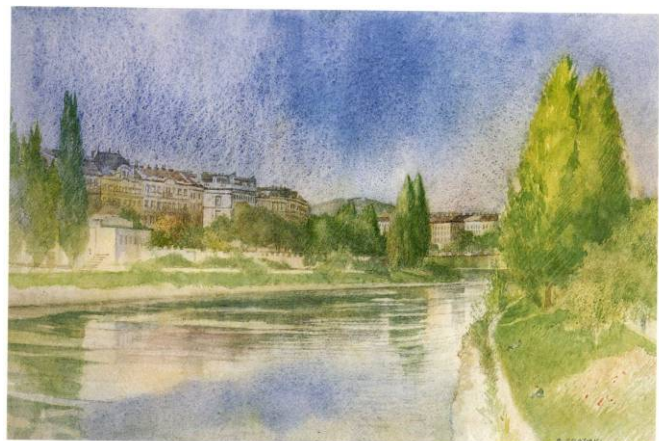
ヨーロッパの絵画は、近代の作品は別にして日本人にとってはなじみの薄い宗教、神話を題材にしている作品が多い。鑑賞に際して、それらの内容を知識として知っておくのは鑑賞の手助けにはなるが、絵画は本来、画家が感動し意図するものを色と形を通して表現する、すなわち「絵画は絵画自身が語る」ものである。描かれている内容の知識、有名、無名などの先入観、既存概念にとらわれることなく、作品とじかにむきあい一人ひとりの感性で作品そのものから何かを感じ取ることが大切であると思う。

鑑賞に際して私がよく勧めてきたことは、「この展覧会のなかから自分の好きな作品を数点、心にしまっけて自分のおみやげとして持ち帰ってもらいたい。」そのことによって作者である画家に関心を持ち、その画家の生い立ち、時代背景、描かれた作品の内容などにまで興味をもち、調べ、絵を見る楽しさがさらに広がっていくのではないだろうか。

ウィーン滞在中は、音楽とともに人類共有の遺産として引きつがれてきた美術作品にも大いに楽しんでもらいたいものである。

◇ひとこと◇

画家。1973年からウィーン在住。ウィーン日本人学校で23年間（1981～2004）美術講師を務め、その間多くの生徒たちと美術館巡りをする。



ドナウ運河 1990年 岡崎信吾